

2024年は、19世紀ウィーンを代表するスター音楽家にして、「ワルツ王」との愛称で親しまれているヨハン・シュトラウスⅡ世（1825～99、以下「シュトラウスⅡ世」と略記）の代表作オペレッタ『こうもり』が初演されてから150年。さらに2025年は、そのシュトラウスⅡ世が誕生してから200年に当たる。そんな2つのアニヴァーサリー・イヤーを飾るのが、今回のジルヴェスター・コンサートだ。シュトラウスⅡ世の生きた時代の香りと伝統を今なお色濃く宿すウィーン・フォルクスオーパー交響楽団の響きに乗せて、記念すべき「ゆく年くる年」のひと時を過ごしましょう！

スッペ：オペレッタ『ウィーンの朝・昼・晩』序曲

フランツ・フォン・スッペ（1819～95）は、フランスに生まれたオペレッタをウィーンに取り入れ、やがてシュトラウスⅡ世を通じて大きく花開くこととなるウィンナ・オペレッタの基礎を築いた人物だ。（なお「オペレッタ」とは「小さなオペラ」という意味で、荘重な題材の多いオペラとは異なる軽さや笑いがメインとなっていったことから、日本語では「喜歌劇」「軽歌劇」と訳されることも多い。）ただスッペが本格的にオペレッタの作曲を始めたのは、1860年代に入ってからのこと。それ以前の彼は、ウィーンの庶民の間で人気を博していた歌あり笑いありの民衆劇の世界で活躍しており、そうした経験がやがてオペレッタの世界に進出する下地を作った。

『ウィーンの朝・昼・晩』も、現在では「オペレッタ」と表記されるのが普通だが、厳密には民衆劇のジャンルに含まれる。当時スッペが指揮者兼座付き作曲家として勤務していたウィーンの私立劇場で1844年に初演された。劇そのものとしては人気がさっぱり出ず、上演は早々に打ち切り。ただしスッペの作った序曲は評判を呼び、現在まで演奏される人気曲となっている。チェロの独奏も登場する情感豊かな序奏に続き、活気と輝かしさに溢れたメインの部分が弾ける……といった具合に、帝都ウィーンの一日が凝縮されたかのような1曲で、演奏会の幕が上がる。

ジーツインスキー：『ウィーン わが夢の街』作品1

ルドルフ・ジーツインスキー（1879～1952）はウィーン出身。エリート官僚として活躍するかたわら、余暇と情熱の全てを音楽に注ぎ込んだ大の音楽愛好家だった。なおウィーンでは、音楽で生計を立てる数々の優れた「職業音楽家」と並んで、こうした音楽愛好

家が数多く存在し、今もなおそうした伝統が保たれている。この街が名実ともに、「音楽の都」といわれる所以である。

そんなジーツィンスキーが、作曲のみならず作詞も手掛けたのが、『ウィーン わが夢の街』。曲が生まれたのは、折しも第一次世界大戦が始まった1914年のことである。それから4年後の1918年に、ウィーンを都とし、中央ヨーロッパに栄華を誇ってきたハプスブルク家の支配する巨大帝国（以下「ハプスブルク帝国」と略）が崩壊したことを考えると、この曲のそこかしこに聴かれる儂いまでの美しさが身に染みるのではないか。じっさい歌詞も、単なるウィーンへの賛歌にとどまらない、懐かしい古都へ向けられた郷愁、さらには愛郷、愛国の想いに貫かれているのだから。

ヨハン・シュトラウスⅡ世：『アンネン・ポルカ』作品117

カトリックの伝統が強いオーストリアでは、1年間の各日にカトリックの聖人の名前が割り当てられており、自分の名前が合致する日を祝うという風習がある（これを「命名祝日」という）。そうした風習に則り、このポルカは1852年、聖アンナの祝日に先立って初演され、大好評を博した。ちなみにシュトラウスⅡ世の父親であり、ダンス音楽家として一世を風靡したヨハン・シュトラウスⅠ世（1804～49）も、この10年前の1842年に、『アンネン・ポルカ』を作曲しており、こちらも人気の1曲だった。

シュトルツ：「プラーターには再び緑が芽吹き」作品247

ロベルト・シュトルツ（1880～1975）は、いわばシュトラウスⅡ世の20世紀版とでもいべき音楽家。ダンス音楽やオペレッタの作曲を行うと同時に、シュトラウスⅡ世に代表される19世紀ウィーンのダンス音楽を20世紀に伝える指揮者としても活躍し、本日のオーケストラの本拠地、ウィーン・フォルクスオーパーとの縁も深い。

そんなシュトルツが、1916年に作ったのが、彼の代表作の1つである、ウィンナ・リート「プラーターには再び緑が芽吹き」。ウィンナ・リートとは、サビの部分にスローワルツを彷彿させる3拍子を置き、人生の喜びと儂さを謡い上げる民謡調の歌で、19世紀後半に一世を風靡した。この曲でも（歌詞はシュトルツと同時代にウィーンに活躍した文筆家のクルト・ロビチェク（1890～1950））、ウィーンの変わらない美しさを背景に、人生の移ろいが歌われる。『ウィーン わが夢の街』同様、ハプスブルク帝国が終焉に向かいつつあった第一次世界大戦中に書かれたことを考えると、感慨もひとしおの1曲である。

ブラームス：ハンガリー舞曲第5番 ト短調

シュトラウスⅡ世の同時代人であり、彼とも交友があったヨハネス・ブラームス(1833～97)。数々の壮大な交響曲や協奏曲、室内楽曲等により「深刻なクラシック音楽の王道」の象徴の存在のごとく思われがちだが、巷の音楽にも大きな興味を示した。

1869年、ピアノ連弾=音楽愛好家が家庭で楽しむことを意図して出版された『ハンガリー舞曲集』もその1つ。当時ハプスブルク家の支配下にあったハンガリーに住むジプシー(ロマ)の伝統音楽だとブラームスが信じていた曲を、独自の視点でアレンジしたものとなっている(ただしこの「第5番」の原曲は、ベラ・ケレル(1820～82)というハンガリー出身の音楽家を作ったチャールダーシュ『バルトファの思い出』だったということが後ほど判明するのだが……)。

いずれにしてもこの曲集はオーストリアをはじめヨーロッパ各地で人気を博し、それらの幾つかをブラームスをはじめ様々な音楽家がオーケストラ用に編曲した結果、ますます広まっていった。第5番は、マルティン・シュメーリング(1864～1943)によるオーケストラ版が有名で、本日もそれが演奏される。

カールマン：オペレッタ『チャールダーシュ侯爵夫人』より「踊りたい」

エメリッヒ・カールマン(1882～1953)は、スッペに始まり、シュトラウスⅡ世によって大きく発展したウィーンのエペレッタに、20世紀の前半に新たな活気を吹き込んだ人物。1915年に初演された『チャールダーシュ侯爵夫人』は、そんな彼の大作となった。筋書は、侯爵の息子と女性歌手(彼女は別名「チャールダーシュ侯爵夫人」と呼ばれている)との間に繰り広げられる身分違いの恋を描いたものとなっている。「踊りたい」は、様々な誤解や、周囲の人々の反対によってぎくしゃくした関係となった恋人同士が、お互いの愛を確かめ合う場面で歌われる二重唱だ。ウィンナ・オペレッタの代名詞ともいえる、ワルツの弾けるようなリズムと、幸福感に溢れたメロディが特徴である。

レハール：ワルツ『金と銀』 作品79

フランツ・レハール(1870～1948)はハンガリーの生まれで、ウィーンを中心に活躍した作曲家である。当時のウィーンは前述したハプスブルク帝国の都であり、オーストリアはもちろん、ハンガリーをはじめとする東欧各地域や北イタリアといった国内各地からやって来た民が行き交う国際都市だった。

1902年に作曲された『金と銀』は、同名のタイトルを掲げる舞踏会のために書かれたワルツ。様々な文化が融合し、夢のような煌めきを見せ合うウィーンの華やきを映し出した1曲となっている。

ヨハン・シュトラウスⅡ世：オペレッタ『こうもり』序曲

1871年、ダンス音楽の世界から、オペレッタの世界に進出したシュトラウスⅡ世。その彼が、1874年に発表した3作目のオペレッタが『こうもり』だ(台本は、この作品が初演されたアン・デア・ウィーン劇場の座付き作家リヒャルト・ジュネー(1823～95)とカール・ハフナー(1804～76)による)。当時のウィーンの社交界を描いた傑作として、昔も今も絶大な人気を博している。

序曲では、作品中に登場する様々なメロディ、しかもシュトラウスⅡ世に相応しく、ワルツやポルカやマーチといったダンス音楽を基としたものが次々と繰り出される。ただし単なるメドレーに落ちないのは、シュトラウスⅡ世の優れた音楽的才能があつてこそ。しかも単に愉快だけでなく、その背後に深い影が宿されているのが大きな特徴だ。

実のところ『こうもり』が初演される前年の1873年、ウィーンでは万国博覧会が華やかに開催された直後に株価が暴落するという事件が起きており、そうした中で意気消沈する人々を音楽によって励ますべく、シュトラウスが『こうもり』を作曲したという経緯がある。影があるから光も輝く。暗さがあるから夢が花開く。シュトラウスの生きたウィーンはまさにそんな街であり、そこに生まれたのが『こうもり』に他ならない。

カールマン：オペレッタ『マリツァ伯爵家令嬢』より「僕のウィーンによろしく」

1924年に初演されたオペレッタ『マリツァ伯爵家令嬢』は、『チャールダーシュ侯爵夫人』と並ぶカールマンの人気作品の1つ。主人公である没落貴族が地方伯爵令嬢の屋敷の管理人となり、彼女との間に愛が生まれ……というストーリーとなっている(台本は、ユリウス・ブランマー(1877～1943)とアルフレード・グリューンヴァルト(1884～1951)による)。

「僕のウィーンによろしく」は、その没落貴族が輝かしくも懐かしいウィーンへの郷愁と憧憬を込めて、ワルツのリズムに乗って歌い上げるナンバーだ。ハプスブルク帝国が第一次世界大戦での敗北を通じて消滅した後、その都であったウィーンが様々な混乱や困難に見舞われる中、帝国が存在していた時代のウィーンの輝きをも偲ばせる、美しく切ない曲想が心を打つ。

ヨハン・シュトラウスⅡ世：ポルカ・シュネル『チクタク・ポルカ』作品365

オペレッタ『こうもり』で、劇中のメインとなるのが、第2幕で繰り広げられる仮面舞踏会の場面。そこに登場したハンガリーの貴婦人と名乗る仮面をつけた謎の女性(実は、主人公であるウィーンの資産家アイゼンシュタインの奥方ロザリンデ)を、当の主人公が自分の妻とは知らず、自慢の懐中時計をひけらかしながら口説く場面の音楽をメインとし

た、快速調のポルカである。時計の「チクタク」という音に乗せ、アイゼンシュタインの浮ついた気持ちと、表面上は口説かれたふりをしながら、心が煮えたぎるロザリンデとの駆け引きが、音楽に乗せて描かれているのがミソだ。

ちなみにオペレッタに進出して以降のシュトラウス二世は、オペレッタに登場するメロディ（それらのほとんどは、彼がそれまで培ってきたダンス音楽を基としている）を取り出した上で、新作のダンス音楽として発表することが多くなった。それは単に、作曲の労力を節約するための自作の使いまわしというだけにとどまらない。現在のような音楽再生技術のなかった時代、多くの人々に、新作のオペレッタを宣伝するための格好の手段であり、さらにオペレッタを観た人が、そこに登場するメロディを用いたダンス音楽を楽譜として購入してくれることを当て込んだ、シュトラウス二世ならではの商才のなせる業だった。

ヨハン・シュトラウス二世：オペレッタ『こうもり』より チャールダーシュ「故郷の響きが」

同じく、オペレッタ『こうもり』第2幕における舞踏会の場面。主人公である夫から、浮気の証拠である懐中時計を巻き上げたロザリンデは、ハンガリーの貴婦人に扮していることがばれぬよう、自分がハンガリー人であるかのように……夫を含めた人々に信じ込ませるべく、歌を歌う。そのナンバーこそが、チャールダーシュ「故郷の響きが」である。

なおチャールダーシュとはハンガリーの踊りで、憂愁と情熱が交差する曲想が基本となっている。しかもこのナンバーでは、ウィーン風の味付けが微妙に加わっている＝歌っている女性はあくまでハンガリー人の真似をしているウィーン女性であることを思わせる点が特徴だ。オーストリアとハンガリーの融合。これもまた、国際都市ウィーンでは普通に見られた（今も普通に見られる）多元的な文化のあり方に他ならない。

ロンビ：『コペンハーゲンの蒸気機関車のギャロップ』

「北欧のシュトラウス」とも呼ばれている、デンマークの作曲家ハンス・クリスチャン・ロンビ(1810～74)。シュトラウス二世と同様、ダンス音楽の世界で大人気を博した。

1847年に作曲された『コペンハーゲンの蒸気機関車のギャロップ』は、当時最先端の交通手段として話題を呼び、シュトラウス二世をはじめとする様々な音楽家がダンス音楽に用いた鉄道をテーマとしている。蒸気機関車に率いられた列車が発発し、疾走し、再び停車する様を緻密に楽しく描写した、沸き立つような小品だ。

ヨハン・シュトラウス二世：オペレッタ『こうもり』より「飲もう愛しい人 急いで」

『こうもり』の第2幕で、ハンガリーの貴婦人に変装して舞踏会に現れ、資産家であ

る自分の夫アイゼンシュタインを逆に手玉にとることに成功したロザリンデ。実のところこのオペレッタの第1幕では、彼女もかつての恋人であるテノール歌手に言い寄られ、まんざらでもない気分となっていることから、ある意味、似た者夫婦ということもできる。

そんな第1幕で、このテノール歌手（ご丁寧にも、ジュゼッペ・ヴェルディ（1813～1901）のオペラ『ラ・トラヴィアータ（椿姫）』のヒーロー——この役にはテノール歌手が想定されている——と同じ「アルフレード」という名前だ！）が奥方を口説く場面で歌われるのが、「飲もう愛しい人 急いで」だ。サビの部分にあたる、やるせないメロディのスローワルトには、「幸せだ、どうしようもないことを忘れられる人は」という歌詞が付けられている。これは、『こうもり』初演の前年に起きた株価大暴落事件を念頭に置いて作られたもの。1850年代以降、帝都ウィーンを近代都市に生まれ変わらせる大工事がおこなわれる中（その総仕上げともいえるのが、1873年に開催されたウィーン万博だった）、当のハプスブルク帝国が様々な内憂外患に見舞われる中で、それを受け入れ、ワインの力で忘れようというほろ苦い人生哲学が反映された1曲である。『こうもり』初演直後から、大人気のナンバーとなった。

ヨハン・シュトラウスⅡ世：オペレッタ『こうもり』より

「ぶどうの炎が燃え盛る中で」（シャンパンの歌）

上の「飲もう愛しい人 急いで」のみならず、『こうもり』では様々な酒が登場する。ワインはもちろん、強烈な蒸留酒として知られるウォッカやスリポヴィッツ、そして「酒の中の王様」として知られるシャンパンがその頂点を飾る。

このオペレッタのハイライト、華やかな舞踏会を舞台とした第2幕は、参加者が豪華な食卓を囲んでシャンパンで乾杯するシーンでクライマックスを迎える。そこで歌われるのが、「ぶどうの炎が燃え盛る中で」（シャンパンの歌）。燃え盛る炎のように、快速テンポのエネルギーに溢れた調べに乗って、シャンパンを讃える歌が響き合う。しかもここで登場したのと同じメロディは、『こうもり』の大詰めである第3幕でも用いられ、そこでは件の奥方ロザリンデが色々あった末に、テノール歌手に口説かれていたことが露呈するピンチをも乗り越え、浮気をしようとしていたアイゼンシュタインを許すという場面で用いられる。

そこで歌われるのは、「すべてはシャンパンのせい」という理論。様々な困難に見舞われる世の中が厳然と存在する中で、たとえ一時であろうともそれに押し潰されることなく、楽しく人生を全うする知恵が鮮やかに示される。1年を締めくくるジルヴェスター・コンサートファイナーレにあたり、この上なくふさわしい。

（こみや まさやす・ヨーロッパ文化史研究家、横浜国立大学教授）